



昭和45年(1970年)

4月号 (No. 298)

 社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文

- エベレストの南壁を目指して……………大塚 博美… 1
- エベレスト隊BC建設……………2
- アメリカ隊エベレスト登山計画……………3
- ニセコ・スキー行……………3
- ネパール皇太子御結婚式……………5
- ソ連登山界も本会エベレスト登山を注視……………6
- 国際山岳連盟総会……………7
- 山岳盤クーンピラのことなど……………7
- 日本ヒンズークシュ会議……………8
- エベレスト留守本部……………2

会員通信

- 再びブータンへ……………小方 金弘… 5
- ダウラギリ4峰遠征……………5

図書紹介

- 山の古典と共に……………山下 一夫…10
- 山岳図書を語る夕べ……………武田 満子…10

図書室便り

- 新刊図書受入報告……………10
- 定期刊行物受入報告……………10
- 洋書受入報告……………10

会務報告

- 三月理事、評議員会……………5
- 海外登山推薦状の手数料……………5
- 谷川岳登山身分証明書交付……………5

その他

- ヒマラヤ観光のお知らせ……………7
- 武田久吉氏に秩父宮記念学術賞……………7
- エベレスト・ソング集……………11

エベレストの南壁を目指して

——キャラバン日誌(Ⅰ)——

大塚 博 美

二月十八日

カトマンズで。出発ま

で行ないます。

第一キャラバン二月十一日カトマン

ズ発ボーター四百人(シエルバが同行

して)十二人。

空輸 二月七日から十六日にかけて

三十便十五トン。

第二キャラバン(隊員キャラバン)

二月十九日カトマンズ発ボーター百十

人三・三トン。

宿舎として借りていた家は、本日

もって解約したいと思ひます。設備が

整っていない上に、予想以上に経費が

かかるためです。したがって帰路はホ

テルを利用します。

カトマンズでの連絡員を同志社大学

山岳部の石川将君に依頼しました。彼

が中心となりこれに大使館の松沢君、

毎日通信員のビナヤ君に協力してもら

い、日本とベスキャンブとの連絡を

取っていきなさいと思ひます。なおボス

トランナーは、A、B、Cの三組を編

成し、緊急の場合以外は徒歩で、一週

間毎に出すよう決定しました。

最後に決まりましたが本日の屋、ホテ

ル・アンナブルナにマカルー隊を招

き、交歓会を行いました。楽しい集

まりでした。

二月十九日 いよいよカトマンズを

離れる日である。一月末から快晴だっ

たが、きょうは朝から雨、約百七十個

の荷物は二台のトラックで午前八時と

十二時シエルバ便乗で出発、隊員は十

三時バスでロモサンダに向き出発し

た。大塚、松田は登山ルートの件、ロ

イヤリテイ二分の一の受領書受け取り

のため遅れ、平林は無線機の最終クリ

アーのためこれまた遅れる。NHKの

二名も、ニューデリー局員との打ち合

わせに残った。

本隊が着いてから二日半でカトマン

ズを離れることが出来たのは先発、中

発の努力によるが、第一、第二次偵察

でマネジメントが大体出来ていたこと

スキー隊との摩擦が起らないと見込ま

れたこと、などが主だと思ふ。しかし

全然曲折がなかったわけではなかった

が、たいしたことではなく、輸送状況

は予想以上にスムーズに進んでいる。

これは空輸がすでに十五トン完了し、

四百人のボーターがスタートしている

ためであった。シエルバの雇用も予定

通りであったが、こちらの方はどうも

迫力がなく、てんで頼りない。これは

二月十八日隊員にシエルバの紹介のと

き、約半数以上を首突撃したのである

が、どうも「てんでいけません」とい

う感じであった。しかしまあシエルバ

はいいつもそうであるが、最初に頼りに

ならぬ印象を受けるものだ。

ネ外務省登山係りマナンドール氏は

二月二十一日付けでバンコクに赴任、

後任は前在日ネ大使館の書記官だった

シャハ氏。JACとしては味方のような

な人があったわけで万事友好的。キャ

ラバン・スタイルでザックを背負って

訪問、登山ルートに関する手紙を渡し

たが、受領書はついに間に合わず。

午後五時、大塚、松田、平林はタク

シーでロモサンダに向かう。七時四十

分着。NHK二名が着いたのは十時ご

ろ。すべて登山以前のことはこれです

っかりクリアされたわけだ。カト

マンズには田村、小西が残る、二月十

一日先発したキャラバンの四百人分の

支払いのためと宿舎の後片付けのため

で二十一日にルクラに飛びます。従っ

てキャラバンの隊員は三十五名です。

二月二十一日 きょうは前半七時m

の登り、後半七百mの下りで、まだ身体がなれておらず下りで膝ががくがくになり、松田サーブは東京で痛めた左足をカバリーして下りで苦労していた。きょうからエキスベディション・タイムを設定、グリニッジ時間より六時間進ませる。皆さる元氣。途中の川で松浦が10cmほどの魚を二匹釣ってきた。本日先頭バールカ村発は午前七時十五分、シエルケ村キャンプ地着午後零時四十五分、最後尾到着は三時四十分。

二月二十二日 晴後曇り。夕立ちあり。春雷がとどろく。ここ三日間必ず夕立ちがあり。キャンプ地に着くと先発キャラバン、ペンゾーから手紙がきており、ジュンベシ手前のセディ峠は雪が二フィートもあり、カトマンズ・ボーターは半分ほど帰るといつており持参のルビーがないので、解雇するボーターの支払いのため至急五千ルビー送ってほしいとの要請であった。サーダーと相談、四百個の荷物を運ぶためボーター・チェンジに必要な概算二万ルビーをシエルバのバサンとポストランナーのダワに持たせ明早朝発させることにする。

二月二十二日 晴。ヤルサへ。朝から抜けるような快晴。コースについて

は別にとりたてて報告することはない。大半の隊員はキャラバンずれしにいて感激は薄いようだが、NHKの中川記者は昼食のチャパティを初めて喰べ、これがチャパティですか、感激ですなあ、といった喜んでいました。かくいう私も十年前に通ったコースの古い記憶が村外れのチョルテンのかたわらに立ったときこつ然としてあぶり出しのように浮び上るのを感じました。キャンプににわたりを売りに来たが、一羽七ルビー、四十七羽購入。バナナ、卵も豊富で楽しい一日。そのにわたりを料理するのに時間がかかり、夜九時夕食となる。本日キャンプ地チャップ発九時三十分。ヤルサ着午後四時。

二月二十三日 晴。ヤルサへ。朝から抜けるような快晴。コースについて

は別にとりたてて報告することはない。大半の隊員はキャラバンずれしにいて感激は薄いようだが、NHKの中川記者は昼食のチャパティを初めて喰べ、これがチャパティですか、感激ですなあ、といった喜んでいました。かくいう私も十年前に通ったコースの古い記憶が村外れのチョルテンのかたわらに立ったときこつ然としてあぶり出しのように浮び上るのを感じました。キャンプににわたりを売りに来たが、一羽七ルビー、四十七羽購入。バナナ、卵も豊富で楽しい一日。そのにわたりを料理するのに時間がかかり、夜九時夕食となる。本日キャンプ地チャップ発九時三十分。ヤルサ着午後四時。

二月二十四日 曇り時々雨。トーセ(一七三〇m)へ。終日降った止んだりの中をトーセまで普通のコースである。行き交う現地人の中の一見してシエルバと思われるのが続々とカトマンズへ向かっている。聞いてみると皆スキー隊だという。一昨日は宮崎安史の日本女性隊に雇われたというシエルバにも会ったが、全く彼らはヒマラヤの自然の中に育った人達という感じで立話しても気分がいい。

午後四時ごろ予定通りジリ終由で先行させた錦織、井上、リエゾンのゴビンダ・クリシュナ・シニレスタをつれてキャンプに合流。空輸隊の田村、小西の連絡文を持参。東京からここまで輸送については全て順調だったが、降雪のため若干先発隊にトラブルが生じた。しかし、心配するほどのこともない。それにしてもペンバとビンジューはよくやっている。

キャラバンでも生活に必要なものが空輸のどきどきでルクラに行ったものがあるが別に大した不便も感じない。チャンボチニへ三月八日に集結の予定になっているが、キャラバンは大体予定通り行くと思う。

二月二十五日 快晴。午前八時三十分トーセ発。チャンマに向かう。きれいな流れで松浦が十五匹魚をとる。七百mの登りも案外楽だった。チャンマ峠から西北はるかにガウリサンカールの雪山が現れる。午後四時チャンマの気持のよい芝の上にキャンプ。早速ソフトボール。愉快なり。

二月二十六日 快晴。午前八時三十分チャンマ発。セディ(二五七五m)へ。リク・コーラへ一気になり、アメリカ隊のボーターが吊橋で切れて落ちたコムの吊り橋を渡り、ケンジャに着く。早かったが昼食、午後は八百mを一気に登り強い日射に大汗をかい

た。午後三時三十分セディ着。セディは部落ではなくゴンパだけのところ。水もキャンプ地もなく、境内の狭いところに軒をさし合せてテントを張る。水は十分くら以下である。本日からキャラバン編成を次のよう

に変えた。お互いよく知りあうためである。

A テント 藤田、神崎、加納、土肥、安藤

B テント 松浦、錦織、井上、嵯峨野、鹿野、成田

C テント 平林、長田、神山、吉川、大森

D テント 広谷、河野、平野、植村、伊藤

本部、毎日、NHKテントは変わらず。

二月二十七日 晴。セディ村発午前七時十五分、十時十五分。ジュンベシ村着午後一時三十分、午後四時。午前一時二十五分と五時十五分ごろ震度一程度の地震があった。きょうは三五〇mのセディ峠越え。キャラバン・コース中の難関の一つ。しかも二月十九日以降の雪で先発キャラバンは大変苦労したところである。多くのボーター

が雪の峠越えをいやがり出発が大変遅れた。結局十時十五分に荷物八個を残し、他の荷物はシエルバのブルキバにまかせて出発した。三千mあたりから雪道となり、約三時間の行程が雪の上を歩くことになった。ボーターのうち靴のないのが三千人くらいいたが、天気がよかったので無事峠越えが出来た。

ジュンベシは美しいシエルバの村で村の入口からはヌンブルの壮麗な姿が望まれた。ロンブツクの僧院長リンボシが中共に追われ、ここに美しいゴンを建てており、ネパール最高の高僧の住む村となっている。僧院に五十ルビーを寄進し、登山隊の安全と成功を祈願してもらうことにする。ここに先発隊は二百一十一人の荷物を残し、ローカル・ボーター三人に守られていた。ヒラリー卿の寄付した学校があり、ちょうど休日だったので校庭にテントを張る。夜は峠越えとネパール皇太子成婚式を祝し、盛大に花火大会を開き、シエルバたちには苦勞さまで、二十ルビーで、ロキシーをふるまっていた。キャラバンは毎日快適に運ばれて

エベレスト留守本部を設置

エベレスト隊の出発に伴い、従来のエベレスト登山本部を解散し、募金、残務整理、隊との連絡をはかるために、新たにエベレスト留守本部が設置された。加藤泰安本部長以下、本部員の氏名と担当は次の通りである。飯野亨(会計)池田錦重(庶務)川上隆(装備)川崎蔵(募金)浜野吉生(連絡)布施敏郎(会計)宮下秀樹(連絡)村山雅美(募金)芳野越天(学術)以上。

エベレスト隊BC建設

三月二十九日、ネパール政府にはいった報告によると、本会エベレスト登山隊は三月二十三日、アイスフォール手前の標高五三五〇m地点にベースキャンプを建設した。同隊は予定通りアイスフォールのルート工作から登山活動を開始、五月下旬サウスコル経由の東南後から、同月下旬には南壁に挑戦する。

松方氏らルクラへ到着

本会エベレスト隊長長松方三郎氏と中島寛隊員は三月二十日朝カトマンズ空港から単発のピラタス・ボーター機でルクラに到着した。同機は先発している本隊用に新鮮な野菜を大量に空輸した。

慶大隊パウダ峰へ出発

五月上旬パウダ峰(六六七二m)の登頂を目指す慶大隊一行七人(磯須須彦隊長)は三月二十五日カトマンズを出発した。

早大隊もソクチェ峰へ

ソクチェ・ピーク(六九二〇m)で全部員合宿を行なう早大山岳部山聖二隊長ら十三人は三月二十七日夜羽田を出発。カトマンズで先発の三人と合流、四月上旬キャラバンを開始する。

女子登攀クラブ隊も出発

アンナブルナIII峰を目指す日本女子登攀クラブ隊一行九人(宮崎英子隊長)は、シエルバ十五人、ボーター百五十人をともなう三月二十三日カトマンズを出発した。同隊は五月中旬南面からのアンナブルナIII峰を攻撃する予定である。

アメリカ隊エベレスト登山計画

Sacramento, California, March 8 (AP)—Mountaineers first scaled Mt. Everest and its neighbors in the 1950s and 1960s. In the 1970s, they're going back to do it again—the hard way.

There is a bold new era in Himalayan mountaineering, with a new breed of climbers who seek routes straight up sheer mountain faces.

A British-led Expedition plans to begin climbing on the South Face of 26,502-foot Annapurna in Nepal about April 1.

Japanese mountaineers attempt a climb on the South Buttress of Mt. Everest sometime this spring. No definite date has been set.

But possibly the ultimate mountain adventure to date will come in the spring of 1971 when an International Expedition attempts a direct ascent of the 7,028-foot-long Southwest Face of 29,028-foot Mt. Everest, highest in the world.

"There can be no doubt as to its offering the greatest challenge possible," said Norman G. Dyhrenfurth, 51, co-leader of the 1971 International Himalayan Expedition with Colonel James O. M. Roberts, a Britisher living in Katmandu, Nepal.

Katmandu is the jumping-off point for the major Himalayan climbs, notable for Everest.

Eight countries are represented so far in the 18-member team. Nicholas B. Clinch, President of the American Alpine Club, called the Dyhrenfurth venture "a very important expedition."

In a telephone interview, he described the changing nature of Himalayan mountaineering and why the Everest-Direct is unique. The goal of the early Himalayan climbers was to reach the top by the line of least resistance, that is, by a meandering route up glaciers and along the easiest ridges.

"Most of the highest peaks all have been climbed," Clinch said. "Now, the next thing to do is tackle them by more difficult ways—to try to climb by various routes such as the faces."

Advancement of climbing techniques and improvement of lightweight equipment—particularly oxygen gear—now permits climbers to attempt the sheer faces of the Himalayan mountains.

The Annapurna Expedition is led by Chris Bonnington, a top British climber who also is scheduled to lead one of the climbing teams on Mt. Everest in 1971. Bonnington is a veteran of some of the most technically demanding climbs in Europe.

A member of the Annapurna team is American Tom Frost, one of the pioneers of the diffi-

cult rock climbing techniques developed in California's Yosemite Valley and now being applied on a massive scale to Alpine and Himalayan faces.

The Japanese Alpine club got first crack at Everest for 1970 after the Nepalese Government in 1968 decided to reopen the mountain land's peaks to expeditions after a three-year moratorium imposed by political tensions.

The Japanese group first planned to try the direct Southwest Face of Everest—the "directissima"—but later Announced it would attempt the South Buttress Route instead.

Dyhrenfurth said his expedition will be split into two teams—one to climb the West Ridge while the other goes up the Face.

The West Ridge Team could help the face team off the mountain in the event of trouble, such as a severe storm, he explained.

Bonnington would lead the Face team which would include Gary Colliver, John Evans and Dr. David Peterson, all of the United States; Rusty Baillie of Rhodesia; Marco Zarnasse and Giovanni Herin of Italy and Toni Hiebeler of West Germany.

Wolfgang Axt of Austria was chosen to lead the west ridge team which included odd Ellassen and Jon Teikland of Norway, Michael and Yvette Vaucher of Switzerland and David Isles of the United States.

Dyhrenfurth said Mrs. Vaucher was thought to be the first woman to be on an Everest Expedition, but the Japanese 1970 team apparently will include a woman, he said.

The expedition, privately conceived and organized, has been endorsed by the American Alpine Club and some financial support is promised by the Mt. Everest Foundation of Great Britain.

The British were the first to launch major assaults on Mt. Everest, finally climbing it in 1953 in time for it to be a coronation present for Queen Elizabeth.

Dyhrenfurth's 1963 American Expedition climbed the peak from the usual South Route and the upper section of the West Ridge, with the West Ridge Team making the first traverse of a major Himalayan peak. The team descended the South Ridge route.

ニヤロ・スキー行

鈴木 郭之

前々から憧れていた粉雪の北海道行く機会がやってきました。関口周也、堀川英司、堀川君の3人に、2月7日午後四時半、日本国内航空103便に搭乗。日本国内航空で使っているYS11の機内は、ボーイングやDC8のように入掛けと連つづ、ゆったりとした二人掛けの座席で、仲々快適である。機内サービスも、今回のデラックスなスキー行の最初を飾るにふさわしいものであった。飛行機は、札幌市内に十五

分位の距離にある丘珠空港に着陸するので、非常に便利であった。

私達五名の男性軍のほかに、小原勝郎氏夫人、斎藤桂女史に率いられた女性軍七名、女性軍の偉力ゆえ、あえてここに記すまでもなく、先刻、会員諸氏の多くが推薦の通り。その一例として、札幌グランドホテルに到着するや、くたんのさ、そう女性軍七名は、早々と日本庭園に面した特別貴賓室に送られた。総ひの造りの風呂と二つの洗面所付きの二間続きバス化粧室という豪華なスイートで、しかも低料金である。フロントデスクから一見ただで恐れをなしたのか、ホテル側のまことに適切な処置であったといえよう。

荷物を部屋に置いた私達は、迎えにきてくれた札幌在住の会員、高沢光雄氏に案内されて、札幌山の会の方々の夕食会に臨んだ。

本会々員、札幌山の会々長氏、家民雄氏と塩田良伸氏の歓迎のご挨拶、同じく会員の相川修二氏の音頭で乾杯、北海道でのアルノール第一峰が放たれた。以来三日間、アルノール類の雪がどどん空けられ、ただただ驚くばかりであった。関口周也会員より、東京側メンバーの紹介があり、続いて北海道側より淡川舞平、正直正銘の二人、誰の生一本ならぬ、正直正銘のETAノールが贈呈され、昨年、堀川英司君がくすねたガムの置物が一年ぶりに持ち主、料亭のおかみに返還されるなど、愉快な行事が続いた。札幌山の会の女性会員達の心づくしのおでんや寿司に舌づつみを打ちながら、最後かつ談笑し時が経つておきた。最後に、昨年シエラ・クラブが大挙来日した際、大愛お世話をして下さった本会の古い会員で北大教授の佐々保雄氏が自ら撮影された北海道の美しい山のスライドを上映して下さい、このような

美しい自然を身近に持っている北海道在住会員をうらやましく思ったり、また、公害都市東京砂漠に住むわれわれの身辺をなげいたりした一幕もあった。

二次会で遅くまでアルコール漬けになっていたはずの北海道の諸氏は、翌朝ケロリとした顔で、バス二台を連ねてわれわれを迎えに来てくれた。エキゾチックな雪の札幌の街を後に、定山溪を過ぎ、札幌岳を左手に見ながら中山峠にさしかかると、白銀に輝く羊蹄山の端正な姿が眼前に浮ぶ。丈余の雪をかきわけた道路が果てしなく続くと思われ、ほどの広大な雪原を、バスはひた走りに走り、羊蹄山のすそを廻りきること、私達の目的地、ニセコ、山々が姿を現わす。札幌を発って後、三時間で昆布の湯温泉に着いた。

チセハウスのご主人で本会々員の織笠蔵氏が、赤銅色にして黒く、かつ赤色にして茶色という不思議な色の顔をほころばせて私達を出迎えて下さった。北海道組は、今冬三十何個目というイグルーの製作に大わらわ。私達も相川ドクターが器用に切り出した雪のブロックを運搬する。この日は、雪のまにみる快晴であった。午後一杯、樺の大木を縫うように滑りながら、織笠氏のレッスンを受ける。

夜、温泉で体を温めた後、食卓につく。チセハウスの食事は、大変おいしかった。一品一品説明に図入りのメモをしている斎藤桂女史が言うのだから間違いない。彼女は、どこでも、食事が出る、刻明にメモをとる。山小屋、即ち食事を提供する側にしてみれば、驚異な存在である。あとで確かめると、食事はどうだった、と聞かれたときのためである、というのが彼女のメモをとる言い分であるが、彼女は、一応何でも胃袋に引受けて(多量に)そのあとで、おごそかに判定を下す。み

そ汁平均三杯、お代わりであるから、この食事のおいしさは想像できるはずである。食後は、またしてもエタノールが並べられて談笑。昼間、札幌勢が作ってくれたイグルーに赴く。戸外はマイナス十何度という寒さであるが、二間続きのイグルーのなかには、とても暖かい。六人用のイグルーだが、十六人が入り込む。室内にはロソクがともされ、織笠氏がブルーマウンテンをナビビしてくれる。こゝでも談笑し、合唱した。明るく、そして暖かい室内で歌う、歌声が極寒の北海道の夜空の下、いつまでも続いた。晴れて、白いものがちらつき始めた。

翌二月九日、新雪がすべてのものを覆い、強い風に雪が舞っていた。期待していたチセスプリ登山は、中止ということを早朝に決めた。氏家氏と織笠氏は、今晩鴨料理をこちそうすることとて、鉄砲をかついで近くの山へ鴨打ちに出掛ける。悪童達は、ネギを切った待っている。期待する一方、鴨ではなくネギを撃ち、氏家氏は正月にひやかしているが、氏家氏は正月に一羽しとめた実績を自慢しながら、さっそうと出掛ける。おともはアイヌの純血犬「千秀」号と、斎藤桂女史ならびに、「登りの政」と異名をとる、大阪から駆けつけ参加した会員庄司政子嬢。わいわい大さきながら出て行く。これでは、鴨も出るに出来ないだろう、と心配する。

相川ドクターは堀川君とともに、山中遊歩としゃれこむ。チセは、樺の大木が多く、雪質が最高によいので、山中散歩は、特に味わいのあるものである。残った連中は、新雪をわけながらスキーに興じる。

昼食に戻ると、ハンディング組は、案の定、鴨もネギもなく手ぶらで帰ってきた。七発ぶっ放したが鴨が飛び去ったあただったようである。織笠氏がすまなさそうにシェンとしているアイヌ犬「千秀」に「ごめんね」とあやまっていた。

午後、ゲレンデで織笠氏のレッスンを受けた。足が馴れて来たので、リフトを使って、長い距離を思い切り滑った織笠氏のあとについて、彼のシェールを外さないように滑るわけであるが、非常にむずかしい。最初の二、三百mはどうやらついて行けるのだがスピードに対する感覚はどうしようもない。彼はスキーの名手と切りえる。小原夫人も若さにかまけて大張切り。ころんでは起き、起きてはころび、そのがらばりようは大したものである。

夜は名物ジンギスカンなべ、そして例によって、エタノール・パーティー。この夜は、ジョニ黒の大塚がまたたく間もなく空けた。たまたま一緒に泊り合わせた北大の孫野教授とニューヨーク大学のシェーファー教授をお招きした。シェーファー教授は、人工降雨の権威で、お二人は色々な実験用機材を持参して、人工的に雪を作る実験をしているのだそうである。これだけ雪が降っているのだから、降るのを止める実験をしてくれないものかなと内心思ったりした。

二月十日、前日より一層雪が降りしきっていた。午前中はまた織笠氏のレッスン。雪が降り過ぎてリフトが終日動かない。午後からは近くのモイワスキー場へ出掛ける。「登りの政」こと庄司嬢は、勇敢にも新雪へどんと入っていく。関口君は大変調子よく一人で飛ばしてはすべりまくっていた。瞬間的に晴れて、ニトスプリ、ニセコアンヌプリが顔を出す。

今夜も豪華な夜食である。前日の撃ちそこねた鴨の代りではないが、ロースト・チキンに一同舌つみを打つ。食後、織笠氏の撮影したオーストリ

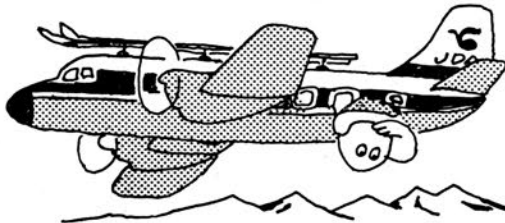
のチロルとニセコの8ミリ映画会が催された。そのフィルムたるや、どれもこれも前衛的で、シェールリアリズムの極地に達して大勢の観客の想像面に訴えねばならないものであった。画面はもうろうとしていて、やたらと動き、ピントが合うのは瞬間的で、織笠氏の説明によればこれは全てエタノールがなせる技とのこと、解説も大変愉快なものであった。これはゴタッペ(怠惰な、しらぬい)の意。いつも岩陰にいて、臆病な、怠惰な魚の名前で、私達は好んでこの語を使つた。フィルムである、皆大いに笑って楽しんだ。この間、氏家氏と関口君は、昨年の仇討ち、返り討ちとばかり将棋に熱戦、舌戦を繰り広げ、今年は仇討ちになって関口君の勝ち越しということになった。

氏家氏はご年配にもかかわらず、その元氣たるや若い者顔までである。エタノールが廻り始めると、鴨撃ち、熊撃ちの得意な話になるのが常であった。正月に撃った一羽の鴨は、八〇人の人達で食べたという。撃ちおとした本人の口へ入ったのは、僅か小指の先ほどであったらしい。

最後の夜を記念して、昨年と同じように皆で寄せ書きをした。

二月十一日、雪はやんで、風もおさまってきた。北海道側の元氣なラッセル要員が参加して、チセハウス出発。湯沼をあげたところに、ビールをデポし、百万弗コースを登る。往路にもお世話になった浅利欣吉氏が、バスで迎えに来て下さる。楽しかった四日間はアツという間に過ぎってしまった。バスに揺られて、また中山峠を越え、札幌に戻った。夕方五時半に札幌を発つ、八時にはもう東京だ。素晴らしい山、愉快な仲間たち、北海道の皆さん、そしてチセハウス、みんな忘れることができない。

いまからでも滑べれる雪山へ...



東京—帯広—釧路
東京—札幌
東京—千歳(深夜便)

日本 JAPAN DOMESTIC AIRLINES
国内航空

お問い合わせ・お申し込みは、お近くの航空代理店または当社営業所へ—東京(274)4411・大阪(312)8561・札幌(25)4231・福岡(65)7361

★ネパール皇太子の御結婚式に参列して★

神 原 達

ビレンドラ・ビル・ビクラム・シャハ・デバ皇太子殿下（二四歳）とラナ家御出身のアイシニワリヤ・ラジャ・ラクシニミ・デビ妃（二〇歳）との御結婚式は二月二十七日から三月三日にわたってカトマンズの王宮で華やかに行なわれた。日本からは天皇陛下の御名代として常陸宮殿下と華子妃殿下が御参賀され、各国の王族、国家元首と共にこのヒマラヤの王国の世継ぎの御慶賀を祝福された。

日本山岳会からは御結婚を記念して銀製のビッケルが贈られることになり、これは現在エベレスト登山中の登山隊がカトマンズに帰還する折にその登山の御報告とともに実物を献呈することになっているが、本会々員の西堀栄三郎博士から、その旨がネパール王室に伝えられた。また日本・ネパール文化協会からは日本の各種紹介の英文図書合計千冊をトリプバン大学に贈呈することになり、その目録が同大学副総長、ウブレティ博士に、同会理事でもある西堀博士から渡された。私ども夫婦も終始西堀御夫妻と行動を共にして、式典参列の榮譽を賜った。

御結婚式の式典の次第はテレビのニュースやグラフなどで日本でも紹介されたように、王宮でラナ家の元ハラジャの宮殿、シンガ・ダーバー（ライオン城の意）にバレードが行なわれ、きらびやかに飾りをつけた象に乗ったビレンドラ皇太子は沿道の人々に手を振って挨拶され、六頭だての馬車に乗られたアイシニワリヤ妃はベールに顔をうずめられてシンガ・ダーバーから王宮に到着された。王宮の前庭の芝生に上つた式場では、ヒンズー教徒の中でも純粹のラジュブート系の

武士階層だけが行なう独特の方法の儀式が、白い衣をつけた王室付きのブライマン僧たちによって行なわれ、招待客は各テントの中からその次第を興味深く、かつ愛情をこめて見守った。インド大使館などのレセプションの折には、ブータン国王の弟であるワンチエク殿下や、シッキムのチョーギヤル（国王）も列席され、またカシミールのマハラジャやその他インドのラジュブート系元藩主のマハラジャたちも多数見えて、まさにヒマラヤの王国の王室が一堂に会する壮観であった。

万博ネパール館に對する本会の協力

万博ネパール館の建設については、新聞紙上その他で、ご承知のことと存じますが、本会の評議員である、今西寿雄氏（今西組社長）が多岐の機軸を払って引き受けられ、また日本ネパール協会でも日高会長を中心に有形・無形のサポートを積極的に行なっております。

しかし、なにぶんにも予算のかかる仕事でもあり、ネパール王国としてもこの点では大いに頭を痛め、各方面の協力を求めているが、各方面に対して二階ブルコニーにかざる写真についての協力を要請がありました。

本会では、本件につき三田会長を中心として十月の理事会で慎重に審議した結果、マナスル以来のネパール王国との関係から、またエベレスト登山の計画中のことでもあり、できうる限りの協力をすべきであるとの結論に達しました。そこで正式にその旨回答をネパール側に出すと同時に、パビリオンの内装関係の設計を担当している第

三次ムグのグループとも種々と検討の結果、ブルコニー背後の壁面にかざる写真の撮影を第二次偵察隊の木村カメラマンに依頼することになりました。そして木村カメラマンのネガを中心として、次のようなアレンジメントが決まりました。

- ① パシユバティナート寺院のカラー・コルトン（2.1×3.0 m）
- ② フーヤンブー寺院のカラー・コルトン（2.1×2.5 m）
- ③ ガルツン万歳のカラー・プリン（2.1×0.8 m）
- ④ マナスル・モンタージュ写真（2.1×4.0 m）
- ⑤ カトマンズ遠望（2.1×3.0 m）白黒（写真撮影） 依田孝喜④ 今西寿雄③ 木村勝久①②⑤

これに要する経費は G・カラー引伸代 五六一・八八〇円

展示に要する経費 七六二・八六〇円

合計一、三二五、七四〇円かかりますが、これについては、本会のエベレスト勘定でカバーすることになりました。

なおネパール館の正面には、エベレストスキー探検隊が撮影した、エベレスト、マチャプチャリ、アマダブラムなどのネガを使用して万博協会が制作したカラー・コルトンが展示される予定です。

会員各位のご協力をお願いいたします（松田）

会 員 通 信

再びブータンへ出発

冠省 日ごろの厚情を有難く感謝いたしておりますが、ご無音に過ぎて申

しわけありません。あるいはご存知かと思いますが、一九六八年のブータンの記録は「ブータン素描」（芙蓉書房）として発表いたしました。われながら恥しい報告でありました。

このたび、ケサン・ウォンチュック・ブータン王妃の暖かいご理解により再び美しいヒマラヤの王国に出かけることになりました。今度こそ、私の全力を投入し、真のブータンの姿を発見したいと念願しております。

四月月上旬に東京空港を出発いたします。滞在は三ヶ月を予定しております。帰国後、ご報告申し上げますが、余りにも急なことであり、準備に忙殺されております。

ダウラギリ第四峰遠征

昭和三十五年三月 小方全弘

私たち大阪府山岳連盟関西登高会ダウラギリ四峰登山隊は、野村哲也隊長以下八名が三月一日と六日の両日に分かれ空路ネパールに向け無事出発いたしました。

登山隊は予定通りキャラバンが進みましたが、三月中旬にダウラギリ四峰（七六三九m）の南西面カベ氷河の四一〇〇m地点にベースキャンプを建設し登山にとりかかる計画でございます。

このたびの遠征には皆様の物心両面にわたる絶大な御援助をいただき、会員一同深く感謝いたしております。とりあえず野村隊長以下登山隊にかわり出発の御報告と御礼を申し上げます。

昭和三十五年三月七日
関西登高会代表 福原喜代男
同ヒマラヤ登山隊事務局長 前田武治

近藤茂吉氏追悼会

昨年二月二十二日逝去された本会名

誉会員故近藤茂吉氏の一周忌として二月二十二日神田聖公会で追悼ミサが開かれ、終わって東京ヒルトン・ホテルでカクテル・パーティが行なわれた。本会から松方三郎、三田幸夫、日高信六郎、成瀬岩雄、岩永信雄、今井喜美子、田辺圭計、交野武一、島田巽、沼倉寛二郎、神谷恭、山崎安治の各氏がまねかれて出席、日高、島田氏からそれぞれ追悼の言葉があり、しめやかに故人をしのんだ。

三月理事・評議員会

（24日7時、本会ルーム）
▽出席者 三田会長、吉沢、深田副会長、山崎、飯野、辰沼、野上、長尾、川上理事、望月、金坂、沼倉、織内、後藤、村山、中田評議員
▽議事および報告
・四十五年度事業計画案の件（飯野）
・四十五年度予算案 原案通り可決
・四十五年度予算案 原案通り可決
・新年度役員案の件（飯野）
・エベレスト登山隊の行動（山崎）
・募金状況報告（村山）
・韓国山岳会招待の件（吉沢）
・現地小集会の件（川上）
・山岳図書を読む夕べの件（野上）

海外登山推薦状の手数料

東京都山岳連盟では、二月一日から加盟団体の海外登山推薦状の手続きに手数料として千円徴収することになりました。

谷川岳登山身分証明書の交付

谷川岳登山身分証明書は四月一日以降新証明書が必要になります。新証明書の交付は本会事務局で取り扱っております。手数料五十円です。

ソ連登山界も注視・本会の工峰登山

モスクワ滞在中の本会海外連絡委員田村俊介氏より、三田会長あてソ連アルビニズム連盟対外連絡委員会書記イェ・ギベンレイテル氏からの手紙とソ連スポーツ新聞「ソビエト・スポーツ」一九七〇年一月十七日号に掲載された、本会エベレスト登山計画の紹介と成功を期待するものの記事が送られてきた。本会エベレスト計画にソ連登山界も多大の関心と期待を寄せていることがわかり、大変興味深い。

(編者)

貴殿のクラブの対外委員会委員の田村俊介殿の仲介のおかげで、ソ連のアルビニストたちは非常に興味を持って南壁よりのエベレスト登攀を遂行される日本の登山者のプランを認識しました。

わが国の中央スポーツ新聞に掲載されました論文を貴殿にお送りします。これにより、ソ連の読者にこの勇敢な企てに関する情報が提供されたわけですから。

私は高山生理学分野における専門家としてこの遠征の際に特に人間のオルガニズムに対する高山環境の極端な諸要素の影響に関する学術調査が行なわれようとしていることを知り、大変嬉しく存じます。かつて辰沼博士が好意をもって一九五二―五六年の日本隊のマナスル遠征の際の非常な高度における医学的、生理学的成果についての回答を私に送付されました。これは高山条件における人間の生理学を研究している者たちにとって非常に貴重なものです。従いまして、私はどのような研究が具体的に貴隊の生理学者や医者に

よってエベレストで行なわれようとしているのが、また彼等はどういう方法を採用するのか、情報を御送付願えれば幸甚であります。

私たちはナンガバルバット(八二五m)へのソ連の高山遠征の準備を行なっております。この時私は生理学分野における総合学術調査を行なう計画であります。

さらにわれわれはまた一九七〇年エベレスト遠征における貴隊の学者たちによって得られるであろう成果についての情報を入手出来れば幸甚です。われわれは自分たちの側から、同様にカラコルムにおける生理学研究の成果についてのわれわれの回答を日本山岳会に提供したいと存じます。

遠征の成功が多岐の場合依存しているエベレストの好天候を祈ることによって、手紙を終えることをお許し下さい。日本の巡礼に次のような諺があるのも意味あることと思います。

「六魂清浄、お山は晴天」

敬具

一九七〇年一月十七日
日本山岳会々長 三田幸夫殿
ソ連アルビニズム連盟対外連絡委員会書記
イェ・ギベンレイテル

地上第三の極地

日本隊のチョモロンマ遠征計画

ギベンレイテル

田村俊介訳

この二十年間でヒマラヤ、カラコルムの八千m以上の高度を持つ十四峰全部が征服された。

世界で最も高い山頂(八八四八m)に五隊二十四人のアルビニストが登頂した。世界の地理文学ではその峰を通常エベレストと命名している。その名称は一八五六年インドの地図測量隊を指揮したイギリス人、ジョージ・エベレストに敬意を表して与えられた。しかし彼はこの世界の最高峰の発見には全く関与していない。この山はもっと古い詩的な名前を持っている。チベット人やシェルパたちは、その山をチョモロンマと名付けている。母・世界の女神。

一九五三年イギリスの遠征隊員テンジン・ノルゲイとエドモンド・ヒラリーがこの巨峰の頂上にピッケルを打ち込んだ。彼等へに続き一九五六年四人のスイス人、一九六〇年には三人の中国人、一九六三年には六人のアメリカ人……そして最も新しい記録としてはインド隊の九人が一九六五年素晴らしい成功をおさめた。その中にはテンジンの甥・二年前アメリカ人と一緒にその山に登ったナワン・ゴンブがいた。

しかしこれらの勝利は世界の最高峰である第三の極地への興味を少しも減ずるものではない。いま再びアルビニストたちの偉大な友、ジャワハルラル・ネルルの言葉を思い出さずにはおられない。――「エベレストの魅惑、高山の呼び声、未踏の地の探索」――が一体どうして全てのアルビニスト達が次から次へとこの大胆なそして危険な冒険に引きつけるのだらうか？ 熟練したアルビニスト達がこの質問に対して答えを見つけたようにしたが、それは出来なかった。彼等が語り得るすべては、この呼びかけを理解し、これを傾聴しようとしたことだけである。だがが多分、この答えは、これが昔から求められていたものの一つ、おのれが志向するピークを勝ち取ろうとする試みの中で、人間を動かせる生命力ある刺

余であるということの中にあるのかも知れない。

この春エベレストの攻撃に日本人が出かける。彼等は単にサウス・コルからの伝統的なルートである東南稜からだけではなく、南バットレスから頂上に達することを望んでいる。これは非常な高度で、かつまた低温条件下で、多分全ての大量の資材や、最高に困難な登攀のテクニクスの応用を強いられることになるであろう。数年前まではこのような試みは、世界中で最も強力なアルビニストでさえも考え及ばなかった。日本のアルビニストたちの高度体験は、いったいどんなものたであり、彼らの成功へのチャンスは現実となるであろうか？ 日出ずる国(訳注・ソ連)においては非常にしばしば、日本をたえてこの表現が使われる。正確には「昇り行く太陽の国」には氷河は全くなく、山の高度も四千mに達しないのだ……

▲雪の修道院――ヒマラヤへの日本の第一回遠征は一九三六年に行なわれた。その時隊員たちはナンダ・ゴリ(六八六七m)の頂上に登った。第二次世界大戦と戦後の混乱は長い間日本のアルビニストの活動を中断した。しかしすでに一九五二年に日本の登山者たちは南アメリカ大陸の最高峰アコンカグアに登っており、日本山岳会の五人の会員が八千m峰のアンナプルナIV峰とマナスルのルート偵察に出発している。高度第八位の山に彼等は二度失敗し、やっと一九五六年に成功をおさめている。この成功はカラコルム、ヒンズークシ、ヒマラヤ、アンデスへの遠征の一大シリーズを呼び起したのである。

一九七〇年のエベレスト遠征隊はアジアで最も古い日本山岳会(今年で日本山岳会は六十五周年を迎えている)が組織している。日本人の世界最高峰

征服計画は一九六三年に生れた。しかしアメリカのツリストたちがエベレスト登攀の冒険主義的試みの際北側国境を侵害したことにより、一九六四年ネパール政府はヒマラヤ山脈全地域を立ち入り禁止とした。この禁止はやっと昨年の春に解かれた。

日本隊は人間のオルガニズムにとって高い環境の健全でない諸要素の影響の総合生理学的研究や、気象学的観測を行なうことを意図している。彼等はジェット気流や雪崩を研究し、リーダーにより氷河の厚さを測定し、氷河の氷の電気特性を研究する。

登攀成功の場合頂上から持ち帰った石は日本で買われる万国博覧会EXPO'70に出品され、アポロ十一号の乗組員によって月で採取された石と並んで展示される。

運営委員の企画に従い、これは地球と宇宙開発の人間の成果の重要性を強調することになる。文部省、毎日新聞社、NHKがこの遠征隊に資金援助する。隊長には松方三郎氏が指名され、日本山岳会の十七人の隊員が選ばれ、遠征隊の中には特に二人の医者が、五人の学術協力者が入っている。この隊には十人のレポーター、リエン・オフィサー、三十二名のシェルパとボーターが同行する。隊員は二月十四日日本を立ち二月二十一日カトマンズに着く。三月二十七日から五月三十日までスポーツ登山と学術調査を行なう。最近明らかになったことだが、日本の偵察隊は十一月二日エベレスト南壁より七九〇〇mまで達し、春の攻撃を行なう人たちのために二十mのロープを固定した。

日本のアルビニストたちの成功と、登攀時の良好な天候を、心から祈りたい。(編者注) 隊員の人員、日程など若干違いますが、原文のまま掲載した。

UIAA 国際山岳連盟総会

——一九六九年——

(在モスクワ) 田村 俊介

期間・一〇月三日〜五日
場所・プラハ(チェコスロバキヤ)
順序

一〇月三日(金)

一時、プラドチャニ宮殿において
チェコ大統領、本大会名誉会長、ビ

N・H・Kの紅白でデュークエイ
セスが、「筑波山麓合唱団」をおも
しろおかしく歌ったが、このデュー
クに「クンピラ大権現」という歌
もある。これは香川県金比羅様に
取材したもので、レコードの
解説には「クンピラは印度の語で
ワシの意……」とある。歌詞もクン
ピラを歌いこんでいる。レコード
番号は東芝TP7359。

ところでクンピラと聞いてエベ
レストまわりの昨今、思いうかべる
人も多かる。同名の山がナムチュ
パザールの北、クムジュン村のすぐ
上にそびえている。

山岳盤クンピラのことなど

花 崎 洋

のだ。クムジュン
から見あげたところ
ではワシの頭、あるいはそのくち
ばしを連想させる山だった。

印度の語とおそらくサンスクリ
ットであろうが、とするとクンピ
ラと金比羅とは宗教的にもなにより
因縁深そう。日本のクンピラは
航海の安全を守る神だが、仏法の守
護神ということからそうなったのだ
ろう。

ナムチュから四〜五日の行程でエ
ベレストの名展望台カラバタール
に着くがこのカラは、あきらかにカ
ラホトやカラコルムのカラと同じ
「黒い」という発想だ。エベレス

エッドウィック・スボボダ氏との会
見。

一四時、実行委員会及び自然保護委
員会(ソリダリタ・ホテル)

一八時、オペラ・サルカラの観劇
(ナロードヌイ・ジバド劇場)

一〇月四日(土)

九時、総会(サリバン・ホール)

一九時、晩餐会(ホテル・国際)

一〇月五日(日)

チェスキー・ライ(チェコの楽園)

ト、ブモリなど白い雪壁に囲まれた黒
い丘といった所だったが、タンボチ
で会ったシェルのバサンカミ(立教
大、大阪市立大に参加)はインド語
系の「黒い月」だ、と答えた。

ネパール語で黒をカロ、ウルドゥ語
でカラというようにヒンディ系のも
のがトルコ語系(インド・アリア語
系)だが、シェルの故郷ソクン
にクンピラというインドの語と
トルコ語系のカラがどのように残
ったのか、「クンピラ大権現」は私
の想像をたくましくさせる。

クンピラ、カラバタールとも

ヘクスカーション
一〇月六日(月)

総会解散。希望者はチェコ山岳協会
の登山家達の案内のもとに、タトラ山
塊に赴く。(一二日まで)

総会決議事項

一、六八年一〇月六日の総会におけ
る議事録承認の件

二、年次報告承認の件

会長のもの

資料委員会のもの

両面とも田畑貞一とグラウンドシン
フオニックオーケストラ。JRT1
054。最高峰なものできばえかど
うかは三枚を試聴された。

このほかヒマラヤについては、昭
和四二年発売の学校舞踊創作レコ
ド「ラマ塔の夕映え」ED172、
「秘境ヒマラヤ」ED173(いず
れもキングレコード)というのがあ
ったが昨年廃盤になってしまった。

南極にヴォーン・ウィリアムスの南
極交響曲(ピクターSX2021)
があり、アルプスによく知られてい
るアルプス交響曲があるようにヒマ
ラヤにもヒマラヤ

交響曲があつてし
かるべきだが、ま

だ譜面だけなのかもしれぬ。

題名だけで山岳盤の中におこむ
とすればマイルスデビスの「キリマ
ンジャロの娘」とか和製グループサ
ウンズ「シルクロード」による「青
い砂漠」などいくつもあがるけれ
ど、日本で発売、紹介されない洋書
ならぬ洋盤に内容のよいものがあり
そう。

海外に出た際は本屋、道具屋の次
にレコード屋をのぞくとよい。

※ ※ ※

青少年部代表のもの
自然保護委員会のもの

三、収支決算承認の件

四、UIAA難度比較承認の件

以上すべて承認された。各項目の内
容については、六九年一〇月発行のU
IAA会報三二号に詳細に発表されて
いる。

五、韓国山岳会入会申込みの件

右承認。なお他にハンガリー山岳会
(会員四五〇名)の入会申込みがあっ
た。

六、世界登山年の件

七〇年を登山年にする決定的理由な
きため却下された。

七、一九七〇年度の会費の件

日本山岳会を含め、各国山岳会の納
入する会費が改めて決定された。

八、六九一七三年副会長選出の件

九、実行委員会の常任及び非常任委
員に関する規約の件

特記事項なし

一〇、六九一七二年実行委員会の非
常任委員四名選出の件

チェコ、スペイン、ギリシャ、ソ連
が選出された。

一一、活動計画

次回総会は七〇年六月、ギリシャの
クレタ島で行なわれる。

また七〇年四月二五日、シャモニー
におこるInternational Meeting of
Young Mountaineers of the UIAA
が開催される。

総会には左記の者が出席した。
事務局側・会長、Albert Egger 他
四名。

各国山岳会、ベルギー(二名)、プ
ルガリア(二)、西ドイツ(五)、フラ
ンス(二)、英国(一)、日本(一)、
ユーゴ(二)、リヒテンシュタイン
(四)、ルクセンブルグ(一)、モロッ
コ(三)、オランダ(一)、オーストリ

ア(一)、ペルー(一)、ポーランド
(二)、スイス(八)、スペイン(四)、
トルコ(二)、ソ連(二)、アメリカ
(一)、チェコ(八)、以上六四名。尚
オブザーバーとしてルーマニア(一)、
ハンガリー(一)が加わると総計六六
名となる。

なお、田村氏の感想文その他がある
が、これは次号に掲載の予定。

(報告要約吉沢)

ヒマラヤ観光のお知らせ

▽期間 五月十七日〜五月二十七日

▽コース 羽田⇄ダッカ⇄カトマンズ
⇄カブタイ⇄コックスバザ
ー⇄ルンパ⇄カトマンズ

▽費用 約二十五万円(ホテル代航
空運賃を含む)

今度当会エベレスト登山隊の輸送を
担当されたバキスタン航空の好意で廉
価なヒマラヤツアーが計画されていま
す。主な見どころは当会エベレスト登
山隊が登攀中のエベレスト及びヒマ
ヤ各山の航空遊覧、カトマンズ及びバ
キスタン遊覧等です。

なお別にエベレスト登山隊ベースキ
ャンプ訪問を希望される方は、羽田か
らルンパまで約十九万円が往復できま
す。

▽切は四月二十日、詳細については
本会事務局またはバキスタン航空(T
EL0311-2164641)まで
ご照会下さい。

武田久吉氏、秩父宮記念

学術賞受賞

本会名誉会員武田久吉氏は、二月十
九日、日本学術振興会(茅誠司会長)
から第六回秩父宮記念学術賞を授賞さ
れることに決定、三月五日授賞式が行
なわれた。賞金五万円。武田氏への授
賞は「多年にわたる高山植物の生態に
関する研究」によったものである。

ろどころに顔を出してきたと思うと宮森君、佐々木君が現われて、専断的に全部除雪車が出動し、バスが八時半に出るようになったからお仕度を願いますという朗報を伝えてくれた。

八時半、われわれは貸切りバスによって国民休暇村の松原荘に運搬された。もしこの日も吹雪で動けなかったら、松原荘に準備した食料その他が全部パーになり、その損害保障の問題なども考えねばならない仕儀になったことであろう。

兎に角一応各自の部屋に落着き、多少遅れたが一〇時半から会議を始めることになった。それぞれの部屋はセントラル・ヒーティングで暑過ぎるくらいであったが、会議場にした食堂の冷え込みにはいい加減閉口した。これは私があながち年寄りだからということでもなかったらしい。

まず、福島岳連の佐々木健臣君(JAC)の開会の辞、吉沢の挨拶に続いて、田中栄蔵君(今会議の議事に関するお膳立ては氏が主力であった)が進行係、宮森常雄君がその補佐ということで、いよいよ本番に入ってしまった。こうなると有効に時間を使う意味から自己紹介を昨夜のうちにやっておいたことは賢明であった。

深田久弥君の高仙丈将軍の話聞いたあと、私が日本及び外国隊の活動状況を全般に亘って話すことになった。時間が関係もあるもので、特に一九六九年の分に絞って説明した。これはずっと前にオーストリアのアドルフ老から知らせてきていたもので、今日が初公開という訳で、中には狙っていた山が登られていたことを知ってガッカリしていた人もあったらしい。これについての詳しいことは近く出る「岩と雪」に発表するから関心の深い人は読んで頂きたい。兎に角、敵もさるもので、これはと思うものは大概や

っているから油断がならない。

一番やっとなと思っただのは、前に私が残されているものの内の最高峰と報告しておいた六五三三峰(ワラの地図の三九九番)と序でにその北にある六五〇二峰(ワラのZ. 三九八)の二峰その他のことであった。この辺の山の位置はワラの最新版の地図(一九六九年三版)と前に発行された分とは少し違う。新しいものではよく訂正されている。

ヒンズー・ラージのツイII峰も誰かが行くだろうと思っていたが、これは英国のインシャーウッド隊が試登した。しかし到達点は六二二〇m。まだ残っているから安心してよろしい。

午後は殆んど田中栄蔵君の一人舞台で、入国問題、地元事情、今までに発行されている地図やその入手の方法、言語問題、外務省からの要請事項の伝達などを説明してくれた。田中君のは机上の実論で、その知識の正確さと該博さには敬意を払ってよい。

文部省の登山研修所では人数の関係もあってバネル・デイスカッション方式が採られているが、参加者が一〇〇人ぐらいだったら、誰かの話を全部が一度に聞いた、あとで質問を自由にやるといったものの方がよいように思う。

これが終ってから六九年の日本隊の活動状況について実際に行った各隊の代表者から、要領のいい説明が行なわれたが、これも大いに参考になった。特に岐阜隊のベギシュ峰Vの問題などは私には面白かった。というのは私が藤井君に聞いた時には初登だということで、そのままだろくに報告したところ、戻ってきたアドルフ老からの一覽表をみると二登となっていた。そこでワラの新版図をみたら驚いたことに既に双児峰のように書きかえられていた。岐阜隊のベギシュV峰は矢張り初登で

いいのである。

ここで序でに書いておくと、双児峰のもう一つの方の峰はファルザンド(ワラZ. 三〇八で六一八五mとなっている)と言い、一九六八年にポーランド隊によって登られている。岐阜峰には番号はないが、高度は六一九六mとなっている。

しかし藤井君の説明と実際の写真によると、ファルザンドとは五〇〇mぐらい離れており、その方が五〇〇mは高かったということである。そうすると高度が今までとは逆になってしまう。これは将来の面白い問題として残されたことになる。ワラやアドルフ老にも連絡してよく研究してもらおう。

広島大医学部の平位剛君の報告も面白かった。二登となつてしまったが、Z. 三五四の六三九二m峰からとつた、Z. 三六二のバノラ写真によると、Z. 三六二のI及びII(六四三三mと六三八〇m)がないのである。平位君らの登った山が違ふなら兎も角、それはどうも考えられない。実に奇妙なことである。これもバノラ写真を全部ボーランドのワラに送って鑑定を求めている。

山には得てしてこういう問題が起るものだから、余程注意し、且よい資料を持ちかえらないうと非常に困ることになる。お互いに注意したいものである。横山史郎君の昨年の単独行の話も愉しかった。風来坊で一年の半分は何処か外国の山をうろついているらしいが、去年はコトガズ水河の奥を徹底的に歩き且登り廻つたらしい。ベギシュのI、IIも南面から登つたらしいが、六八年にもうオーストリア隊に登られていたことは知らなかったらしい。彼の記録は詳細に書いてもらったのでいづれ公表できるが、その出来ない部分もある。これはついでが滑つてしまったのであろう。その他にも飛んでも

ないところへ行っているがここではやめておこう。

こうしていろいろの報告があったがその間に東京から連絡があつて、ある山への登山申請が却下になったという山へ日本隊が無許可で登つたから、今後この山へ日本人は登らせないことになったということなのである。結局はこういう事態になるのであるから、規則に違反するようなことは絶対にやつてもらいたくないと思う。

シブトンなどはバネルからエベレストへの越境報告書に礼讃の序文を書いている。シブトンほどの人がなぜこういうことをするのか、私にはその理由がわからない。

さてそろそろ結論の方へ向つていこう。玉川大学の三瓶清朝君は一九六八年にコヨ峰やシャール・ジャンリ峠その他を歩いているが、コヨは帽子、カローは一〇万、シャールは黒い雪とか、地名についても研究をしてくれている。これなどもよい趣味である。

兵庫岳連の西村清太郎君は、チトラのドロマツにいたシャールザダさんの本当の名はBurhan-ud-din Khan、シャールの方だけでは誰だかわからないということをお話してくれた。

中馬敏隆君もなかなかの勉強家だ。ファルシ語の研究の一端を披露し、ミール・サミールはメル・サミールで、元をたせばスメル山になるのではないかと語っていた。アフガニスタンのパキスタン関係書目も配布してくれた。

宮森君その他の地図、高橋定昌君のパキスタンの政情一覽表、高木泰夫君の中部HK登攀年表(参考文獻付)などもそれぞれに労作であつて、彼らが単なるクワイミング・アニマルやバガボンドでないことをよく示している。

それにつけても湯浅君や雁部君などがそれぞれの研究分野で話すことになつてしたが、都合で出席出来なかったのは残念であつた。

暗くなつてから今度は皆が持参したスライドや映画をうつし、その場その場で山の比定や討論を行なつたが、これも大いに役に立った。時間の都合で折角持参されたものが上映されずに終わったものもあった。

三日目の九日午前中は、七〇年と七一年にHKへ出かける予定の人達に説明をしてもらう。その結果ここでは、前者が一隊、後者が二三隊で、HKは年毎に賑やかになつて行くことがこれでもわかつた。全く同じころへ行く隊もあつたこの調整には困つたが、やはり日山協への届出順にでもしなればおさまらないうと思ふ。

最後に深田君が締めくくりに言葉を述べ、この会を今後どのように運営して行くかについての提案がなされ、一応組織委員数名を指名して検討することになった。日山協との関係もよく考えなければならぬ問題である。

それからまだ少し時間があつたので私から、HKには限らないが、日本の隊は日本人としての矜持を忘れず、外国隊の範となるような行動をとつてもらいたいという希望を述べ、正午五分過ぎに全日程を無事終了することが出来た。八〇年来の大吹雪に遭遇し、車で途中まで来たが雪に埋まってしまつて到々参加出来なかつたような不運な人もあつたが、天災ではどうにもならない。

なお来年は二月の下旬に岐阜県大垣で開催することが万場一致で決定した。この種の会議は出来るだけ東京以外の土地でやつた方がいいように思う。(終り)

図書紹介

山の古典と共に

大島堅造 著

明治の末期から昭和の初期にかけて山登りをした人たちの中には、山は心身鍛錬の道場だ、という信念をもっていた人が多かった。時代の要請というより修験道の流れとでもいった方がい

いだろ。大島さんは当時、住友山岳会の会長を引受けて、関西の登山界ではその方面で最もよく知られた人の一人であった。関西では毎日登山や毎休日登山が盛んに提唱されていた頃のこと

で、無論大島さんも会社の重職にありながら、日曜・祭日ごとにフル装備で六甲へ登り、大いに心身鍛錬なるものに専念されていたことはいまでもない。しかしその大島さんが、一方では大いに海外の山岳文献を漁り、今では既に古典となった多くの名著に親しみ、しばしば山岳雑誌にその紹介文や感想文を掲載されていたことは、未だ記憶に新しい。大島さんの愛蔵される外国山岳書の量は、当時から相当なものだと聞いていたが、それらの文献の多くは、ロンドンとニューヨーク勤務中に蒐集されたもので、その蒐集には並々ならぬ努力が払われたものだと言及

んでいる。大島さんは今年、確か八十三歳になられたことと記憶しているが、このたび永年書庫綴られた山の古典についての研究や紀行文をもとに、新たな書きおろしも加えて、「山の古典と共に」を上梓された。

その基調となる山の古典については、クリリッジの「ジムラーとアルピニズムの起源」を始め、アルプスの黄

金時代に活躍したティンダル、アブルツジ、スチーブン、フレッシュユイー

ルド、ジャベル、ウインバー、マンメリーなど、ヨーロッパの著名な登山家たちのほか、アメリカ大陸の登山家明

期に登場したバイオリニャーたちや、ヒマラヤに挑戦した登山家たちの著書をもとにその伝記や登山記を、大島さん

独自の情熱的な文章で綴り、最後は「登山に関する内外の古典あれこれ」で、山岳図書紹介の締めくくりをつけている。

大島さんは、これらの古典に親しむことによって山岳文学をいっしょくしむことを知り、併せて人生への多くの教訓を学びとられた模様である。

この著書に収められた紀行文はそう多くはないが、「日本アルプス昔話三題」や「晩秋の秩父行」その他で、山への限りない熱情を汲みとることができよう。

山の古典を愛し、古きよき時代を懐かしむ人々に、敢えてこの一本をすすめて。昭和四十四年九月若溪堂発行、B6版、二九〇ページ、定価一、五〇〇円。

山岳図書を語るタベ

「山岳図書を語るタベ」を二月二十

六日午後六時半から図書委員会主催で本会ルームで行なう。図書担当をして十年になるがその間戦後の日本山岳会の図書の充実と心掛けてきた。「この一本展」や「図書交換会」などを重ねて、近頃は図書に対する意識は高まってきているといえる。野上理事からは、四十四年度の図書予算は約十五万円で、その大半は製本費にとられてしまっている。ACなどから比べればJACの蔵書量は問題にならない、といった話題に始まって、別にテーマを決めるわ

けでもなしに山に関する本の勝手気ままな楽しい話題が九時頃までつづきました。次にその時話題にのぼったものの中から二、三を紹介いたします。まず、蔵書の話から、深田さんが珍本のスタインが全部揃ったと嬉しそうに披露された。大島さんは「日本風景論」が初版から十五版まで揃っていて各版それぞれ内容が違って、面白いというお話し、吉沢さんはスマイスを全部揃えようと思ったが二十九冊のうち一冊だけ小説がまだ手に入らないと残念そうに話されました。

各国の遠征隊はどんな本を持って行っているのでしょうか。遠征のとき英国史を読んで、と島田さん、ティルマンはカラマゾフの兄弟を持っていた。ドストエフスキーや、ダンテの神曲を読んでいるものもある、等々。

次に、田辺主計さんが脱走記に興味を持たれて集めておられますが、その中で一番好きなのもの一つとして、「No Picnic on Mt. KENYAI by Felice Benazzi」にご紹介されました。これは、ケニア山の麓にあるイギリスの捕虜収容所に入れられていたイタリア人の捕虜が収容所の仲間二人と何か月もかかって登山用具を作り出し

い当てがいぶちの中から登山のための食糧を少しづつ貯めて、ある日、十四日経ったら帰ってきますという書き置きを残して、ケニア山の山頂めがけて脱走します。暴風雨に遭ったりして困難を極め、頂上の少し手前で登頂をあきらめて無事に収容所へ戻って来ます。そこで当然裁判を受けて刑に処されるのですが、監禁されている間、三人はケニア山の良く見える二室を当てがわれ、食糧もたっぷりとくられて、終日ケニア山を眺めながらその思いでにひたって日々を過ごさせてもらい、それが彼らにとっては、登山の思い出にも増して楽しい思い出であった、とこ

の回想記に書かれているそうです。たとえ戻って来たとはいえ、一度は脱走した捕虜がこのような処遇を受けたということは、イギリス人のアドヴェンチャーを愛する精神の面目躍如たるものがあって、大変興味深いことに思われます。

最後に吉田久兵衛さんに天保年間に作られたと思われる信濃絵図を見せていただきました。三枚のうち一枚は、岩絵具で仕上げられた今も色あざやかなものではじめて北アルプスを望み見たこの作者の驚きが伝わって来るようでした。いずれも、槍、穂高、御岳等の関係位置や形に多少の変化があり、作者の視点にも興味が持たれました。また、地名や山名の考証にも貴重な資料の一つではないでしょうか。

その他にも興味深い話題が次ぎず、若い世代も交えて時間のたつのを忘れました。出席者は次のとおりでした。

(武田) 田辺主計、島田賢、岩永信雄、吉沢一郎、小林義正、深田久弥、牧野文子、山崎安治、佐藤邦彦、笠原正明、大橋晋、伊藤博夫、中居靖男、沼倉寛二郎、広島三朗、海津正彦、松村寿、野上成男、山崎郁郎、武田満子(順不同)

図書室便り (昭・45・2)

新刊図書受入報告

あかね書房寄贈
(1)「大島亮吉全集2—随想—」昭和45 芙蓉書房
(1)小沢重夫著「素顔のモンゴル—未踏のアルタイ山塊に挑む—」昭和45 登歩溪流会寄贈
(1)「追悼—故山田長政君—」昭和45 広瀬誠氏寄贈
(1)広瀬誠著「立山信仰」昭和45 富山県教育委員会刊
加納一郎氏寄贈

(1)加納一郎著「極地探検—未知への挑戦者たち—」昭和45 社会思想社刊
小林義正氏寄贈
(1)東京天文台編「理科年表—昭和45年—」昭和44 丸善刊
(1)「昭和44 丸善刊
エベレスト登山隊寄贈
(1)日本山岳会「第一次—第二次エベレスト偵察隊報告書」昭和45
(2)「エベレスト・ソング」昭和45 定期刊行物受入報告
【部報・会報類】
(1)「北海道自然保護協会会報」No. 8 45-2
(2)兵庫県山岳連盟「兵庫山岳」No. 33 45-2
(3)「甲南山岳会時報」No. 11 1969
(4)京都山岳会「京都山岳」No. 537 70-2
(5)「名古屋山岳会月報」No. 20 45-2
(6)東京野歩路会「山嶺」No. 478 45-2
(7)日本自然保護協会「自然保護」No. 91-92 44-11-12
(8)「登歩溪流会会報」No. 12 45-1
(9)日本登山学校「雪と岩」No. 22 45-2
(10)「雑誌」
(1)「アルプ」No. 144 70-2
(2)「岳人」No. 273 70-3
(3)「HIKER」No. 173 70-3
(4)「山と溪谷」No. 378 70-3
(5)「毎日グラフエーベレスト登山隊出発—」70-3-3
洋書受入報告
田村俊介氏寄贈
(1)Hugo Jehnek "Vysoké Tatry—vo farebné fotografii—" Miro-sky Kutacka. 1969.
Journals Arrived in February 1970
1. "Die Alpen" Nummer 1, Januar 1970.

2. "Appalachia" Vol. 37, No. 4, December 1969.

3. "The British Mountaineering Council. Annual Report." 1968.

4. "Chicago Mountaineering Club. The Newsletter." Vol. 23, No. 4, Oct./Nov./Dec. 1969.

5. "Mountaineering" Vol. 5, No. 6, Winter 1969.

6. "Mountain" No. 7, January 1970.

(d.s.) NO. 6

各地の花だよりがきかれるこのころです。二月二十六日の『山岳図書を語る夕べ』は、あのどしゃぶりににもかかわらず実に二十余名の方々が集りになりました。気楽な話はあつちへとびこつちへとび、思い立って中途から吹きこんだテープも終りまで吹きこむことができました。まるでコンニャクのテープです。年一度二月下旬に今年から開きますのでよろしく。(東)

ルーム日誌(45年2月)

5日(木) 定例理事評議員会

6日(金) 日ネ協会ネパール語講習会

7日(土) ジャン・フランコ氏との交歓会

13日(金) 日ネ協会ネパール語講習会

14日(土) 全学岳連委員会

16日(月) 北大山の会

20日(金) 日ネ協会ネパール語講習会

23日(月) エベレスト登山本部会

26日(木) 山岳図書を語る夕べ

二月中来室者 三五八名

エベレスト・ソング集

エベレスト登山隊が携行したソング集が出来ました。山の歌がすべてもうらされていきます。残部が若干ありますので希望者は至急本会エベレスト事務局まで。頒価三百円、送料六十円。

四十四年度会員総会

四十四年度会員総会は四月二十五日(土)午後三時から本会ルームで開催します。多数会員の出席を期待いたしております。

あとがき ネパール皇太子の成婚式に出席した神原氏に依頼してインド隊のエベレスト正式報告書「ナイン・アトプ・エベレスト」を入手出来てにこにしています。(山崎)

昭和四十五年四月十日発行

東京都千代田区神田錦町三一二 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也
送 料 別 受 け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2~15, 電話(943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町7, 電話(352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15, 電話(731) 7331 (代表)
工場: 大阪工場(堺市), 東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話(352) 1556・1557